

おおいた

温故知新

2017
大分の先人たちの
知性と感性に学ぶ

ゆかりの人々 咸宜園

04 FIF

かんぎえん
咸宜園開塾二百年



咸く宜し

《廣瀨淡窓肖像(部分)》(廣瀨資料館蔵) 画像提供: 咸宜園教育研究センター

咸宜園は、江戸時代後期の儒学者・廣瀨淡窓(1782~1856)が豊後・日田に開いた私塾です。文化14年(1817)、堀田村(現日田市淡窓町)に開塾した後、明治30年(1897)の開塾までに全国からの入門者は約五千人を数え、当時における日本最大級の規模を誇りました。「咸宜」とは、「すべてのことがよろしい」という意味で、淡窓は門下生一人ひとりの意思や個性を尊重する教育理念を塾名に込めました。「三奪法」(入門時に年齢・学歴・身分を問わない)や「月日評」(月ごとの成績表)をはじめ、数々の個性的な教育で知られる咸宜園からは、儒学者や教育者、医者、政治家など、多岐にわたる人材が巣立っています。また、漢詩文との関わりが深い南画家たちの数も少なくありません。



咸宜園(秋風庵)

江戸時代後期、日本最大級の規模を誇った日田の私塾「咸宜園」とは。業績をひろく県民に紹介する「おおいた温故知新」大分の先人たちの知性と感性に学ぶ」では、2017年度の第一弾として、今年開塾200年を迎えた咸宜園をとりあげ、塾主をつとめた廣瀨淡窓、廣瀨旭狂、後に南画家として大成する帆足杏雨、平野五岳、廣瀨淡窓を訪れた田能村竹田、頼山陽など、咸宜園ゆかりの人々の資料を幅広く紹介します。

大分県立美術館で 大分ゆかりの 四季と知に触れよう。

春夏秋冬、四季を通じて様々な表情を見せる日本の自然。古来より人々は移ろい行く季節の変化を敏感に感じ取り、折々の美しさを愛で親しんできました。日本人特有の自然観や美意識は其中で生まれ、独自の美術が生まれる土台となりました。コレクション展Ⅳでは、「自然への憧憬」と題し、詩情豊かに自然を描き出した作品の数々をご紹介します。ぜひ美術館にお越しください。

2017コレクション展Ⅳ 自然への憧憬

2017年10月6日(金) → 12月5日(火)

大分県立美術館 3階 コレクション展示室

《前期》10月6日(金)~10月31日(火) 《後期》11月2日(木)~12月5日(火)

●11月1日(水)は展示替えのため休展 ●作品は一部展示替えを行います

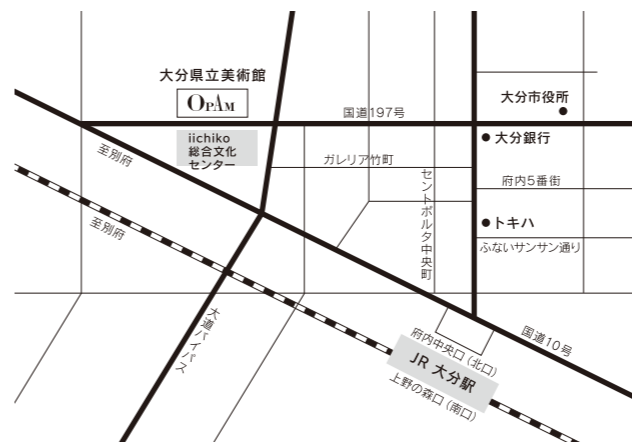
開館時間 | 10:00~19:00 ※金曜日・土曜日は20:00まで(入場は閉館の30分前まで)

観覧料 | 一般300(250)円/大学生・高校生200(150)円 中学生以下無料

※()内は20名以上の団体料金 ※高校生は土曜日に観覧する場合は無料 ※県内の小学・中学・高校生(これらに準ずる者を含む)とその引率者が教育課程に基づく教育活動として観覧する場合は無料 ※大分県芸術文化友の会びび KOTOBUKI-TAKASAGO無料、UME団体料金 ※障がい者手帳等をご提示の方とその付添人(1名)は無料

会場 | 3階 コレクション展示室 ※予約不要・要展覧券観覧券

10/8日・10/22日 | 13:30~14:30
11/12日・11/19日
10/27日・11/24日 | 17:00~18:00



大分県立美術館

〒870-0036 大分市寿町2番1号
TEL 097-533-4500 FAX 097-533-4567 <http://www.opam.jp>
JR大分駅府内中央(北口)から徒歩15分/大分ICから車で10分



3 1. 福田平八郎《茄子》1927年 2. 岩澤重夫《嵐》1973年 3. 片多徳郎《夏山急雨》1914年(寄託品)

おおいた温故知新2017
~大分の先人たちの知性と感性に学ぶ~ vol.1

特集展示

咸宜園開塾200年 咸宜園ゆかりの人々

2017年11月2日(木) → 12月5日(火)

※2017年度「コレクション展Ⅳ」の期間中

大分県立美術館 3階 コレクション展示室内(C1展示室)

私塾「咸宜園」を開塾した儒学者・廣瀨淡窓をはじめ、咸宜園ゆかりの人々の資料を幅広く紹介する特集展示です。

企画協力: 咸宜園教育研究センター

● 関連イベント

「廣瀨淡窓と咸宜園の教育」

日時: 2017年11月18日(土) 13:30~15:30
会場: 大分県立美術館 2階 研修室
講師: 深町 浩一郎 氏 [咸宜園教育研究センター研究員]
定員: 先着50名 申込: 不要



会場: 大分県立美術館 3階 コレクション展示室

11/12日・11/19日 | 13:30~14:30
11/24日 | 17:00~18:00 ※予約不要・要展覧券観覧券

メンバー募集!

大分県芸術文化友の会
OITA PREF ARTS & CULTURE MEMBERSHIP

びびとは、大分県立美術館と iichiko 総合文化センターを中心に大分県の芸術・文化を多くのみなさんに楽しんで、そして広げてもらうためのメンバーシップです。
詳しくは <http://www.opam.jp/bibi>

おおいた
温故知新

2017
大分の先人たちの
知性と感性に学ぶ

「県民とともに成長する劇場と美術館」

中世以降の日本の歴史の中で活躍した大分県ゆかりの芸術家や学者の生涯、業績、作品を、県民のみならずの創意を募りながら、iichiko 総合文化センターと大分県立美術館の共同自主事業や

民間団体および行政機関との共催企画の形で紹介する企画です。2017年度第1弾は、「咸宜園開塾200年 咸宜園ゆかりの人々」をご紹介します。

近世最大規模の私塾 「咸宜園」の主宰者

教育に尽くした生涯

廣瀬淡窓は、天明二年(1782)に日田豆田魚町の商家博多屋・廣瀬家の長男として生まれました。淡窓は、幼時から漢学・漢詩を学び、一六歳で福岡の亀井塾に学びますが一八歳のとき病のため退塾、以後療養しつつ独学しました。文化二年(1805)二十四歳のときに、病弱であったため家督を弟の久兵衛に譲り、豆田町の長福寺学寮を借りて塾を開きます。のち借家して移り「成章舎」と名づけ、文化四年(1807)には豆田裏町に塾を新築し「桂林園」と名づけました。文化十四年(1817)三十六歳のとき、郊外の堀田村に塾舎を移築、住居を新築して「咸宜園」を開塾し主宰しました。晩年まで塾教育を直接指導して教育システムを整備していくなど力を尽くし、「咸宜園」は江戸時代後期の全国最大規模の私塾となりました。安政三年(1856)七十五歳で歿し、中城村の長生園に葬られています。

三つの業績

廣瀬淡窓は「条理学」を唱えた三浦梅園、「窮理学」を唱えた帆足万里

廣瀬淡窓

ひろせ たんそう
Hirose Tanso



小栗布岳「咸宜園図」1883年(佐伯・善教寺蔵) 画像提供: 咸宜園教育研究センター

とともに「豊後の三賢」と称されています。このような高い評価を得ているのは、淡窓が三つの面で大きな業績を上げているからです。三つの業績とは、「教育者」「漢詩人」「儒学者」として、それぞれに顕著な業績を残していることです。

◇ 「教育者」としては、五十年にわたり私塾「咸宜園」を主宰し、全国六十六カ国からおよそ四千人にのぼる多くの人材を育成し、その門人たちは政治家・学者・教育者・医者・僧侶・画家などとして中央や地方の各方面でリーダーとして活躍しました。

咸宜園の教育の特色は、その独自の教育システムにありました。入門時に年齢・学歴・身分の三つを奪う「三奪法」による平等主義、毎月の成績によって等級を評価する「月旦評」による実力主義、寮の共同生活で全員に役割を与える「職任制」による実学主義などです。この教育内容は、明治以降の近代的教育制度の先駆的な制度であったと評価されています。「咸宜園」は、当時、日本最大規模かつ最先端の私塾でした。

もちろん、塾生には休日や休講(放学)のとき、学業から離れた山行などのレクリエーションなどの機会

もありました。

◇ 「漢詩人」としては、『遠思樓詩鈔』など多くの漢詩を作り「海西の詩聖(九州の最高の詩人)」とも称され、菅茶山、頼山陽と並ぶ江戸後期の三大漢詩人といわれています。簡潔で味わい深く上品な「高枯淡雅」な詩風と評され、当時、大阪等では二人をしのご人気を博したといわれています。

咸宜園では漢詩文による教育を行い、とくに「詩は人の情を詠うもの」として漢詩の詩作を奨励し、それにより塾生の情操を育み、思いやりのある豊かな人間性をつくっていく教育を行いました。淡窓は塾生の作った詩を編集して『宜園百家詩』として出版しています。

◇ 「儒学者」としては、『約言』『析玄』『義府』『迂言』などの多くの著作を著し、中国思想の根底にあるものを「天」として捉えた独自の「敬天思想」を唱え、さらにその具体的行為である「善行」を常に実践した徳行家でし



《月旦評》1848年(廣瀬資料館蔵)



た。それは一万善の実践記録『万善簿』として残されています。

淡窓は自分自身を老荘も仏教も好む「通儒(全般に通じた儒者)」であると記しており、また自分の学は折衷学ではなく中立の立場であると明言しており、朱子学・徂徠学などの一つの学派に偏らない独自の思想を持った学者であったと言っているでしょう。

◇ こうした多くの業績が評価され、天保十三年(1842)、六十一歳のときに幕府より永世苗字帯刀の恩命を受けています。

淡窓を訪れた人々

田能村竹田

たのむらちくでん 1777-1835

豊後岡藩の侍医田能村碩庵の二男として直入郡竹田村(現竹田市)に生まれる。はじめ藩に出入りするが、詩画を志し三十七歳で隠居。幅広い見識と卓越した画技をあわせもち、江戸時代後期を代表する南画家のひとつとして活躍。また、生涯を郷里竹田を拠点として過ごし、大分各地にその画法を伝え、同地の南画を隆盛に導いた。

頼山陽

らいざんやう 1780-1832

広島藩儒頼春水の長男に生まれる。広島や江戸で学んだ後京都に開塾し、歴史家、詩文家として高い名声を得る。殊にその著書『日本外史』は広く知られている。関西文人界の中心人物として、田能村竹田をはじめ多くの文人たちと親交した。

木下逸雲

きのしたいつうん 1799-1866

長崎に生まれる。長崎の乙名として市政に携わったのち、医を業とした。石崎融思や江稼圃に画を学びさらに諸々の様式を自得して長崎の南画家の第一人者となった。日田を度々訪れたほか、田能村竹田とも親しく交友した。

平野五岳

ひらのごがく 1809-1893

日田専念寺の僧。1819年咸宜園に入塾。南画を描き始めたのは天保末年頃からで、田能村竹田に私淑し森秋艇や帆足杏雨らと交流する一方、度々訪れた京都では貴名海屋や前田暢堂らと交わり、次第に画技を深めていく。1873年にはウィーンの万国博覧会に出品、1876年には大久保利通をとおして明治天皇へ画が献上されている。

帆足杏雨

ほしあきりう 1810-1884

豊後大分郡白杵藩藩戸次村(現大分市)に生まれる。幼少の頃より帆足家に立ち寄り、田能村竹田に接し、1824年竹田に正式に入門、同年竹田の実子である太一(如仙)とともに咸宜園に入塾。画では、師竹田の画風をよく消化し、幕末から明治期にかけての大分の南画界をリードした。

田能村如仙

たのむらじよせん 1808-1896

田能村竹田の子として豊後国直入郡竹田村に生まれる。藩校由学館に学び、1823年京都の医家・小石榊園に入門。翌年には、日田咸宜園に学ぶ。1825年手医師並として藩に出任。1829年上京し、小石榊園に再入門。維新後は藩の医学寮の助教となり、家塾を開いて後進を教導した。

千原夕田

ちのらせきでん 1830-1894

日田豆田町の豪商丸屋千原幸右衛門の家に生まれる。1843年咸宜園に入塾。その後長崎の木下逸雲について画を学び、蘭の画を得意とした。また、書もよくした。千原家には多くの書画工芸品が蔵されており、夕田も各地の文人たちと盛んに交友した。特に平野五岳とは、若年時より親しく交わっている。

長三洲

ちやうざんしゅう 1833-1895

学者長梅外の長子として日田郡馬原村

出品作家略歴

塾主をつとめた人々

廣瀬淡窓

ひろせ たんそう 1782-1856

日田郡豆田魚町の豪商博多屋三郎右衛門の長男として生まれる。幼少期より伯父や両親に学問の手ほどきを受け、のち長福寺法幢・棕野元俊・頓宮四極・松下西洋らに学ぶ。1797年には福岡の亀井塾に入門。やがて病のため日田に帰り、療養後の1805年、豆田町の長福寺学寮を借り受けて開塾。独自の教育方法で多くの門弟を集め、1817年に開いた咸宜園はその名を全国に知られるようになった。また、詩書の分野でも高い評価を得ている。

廣瀬旭荘

ひろせ きよとせう 1807-1863

日田に生まれる。廣瀬淡窓の末弟で、のちその養子となる。1815年咸宜園に入塾。1823年筑前の亀井昭陽に入門。学を修めその塾の都講となった。また、備後の菅茶山にも学び、その後第二代塾主として咸宜園を一時預かる。やがて日田を去り諸國を遊学した後、大坂に塾を開き門生の教育に力を注いだ。詩書をよくし、著作も数多い。

廣瀬青邸

ひろせ せいそん 1819-1884

豊前国下毛郡真坂村(現中津市三光村)に生まれる。本姓は矢野氏。1834年咸宜園に入塾。二十一歳で塾の都講となり、のち淡窓の養子となって第三代塾主を務めた。1877年には東京に東宜園を開塾した。書や画にも巧みであり、旭荘・林外とともに「三広」と称せられる。

廣瀬林外

ひろせ りんがい 1836-1874

廣瀬旭荘の長男として日田に生まれ、のち淡窓の嗣子となる。1843年咸宜園に入塾。十七歳で準都講となる。1862年より咸宜園を主宰し、横田国臣や清浦奎吾など明治期の逸材を多く輩出するなど、幕末から明治初期の最も困難な動

咸宜園の人びと

塾に学んだ人々

明石秋室

あかししゅうしつ 1793-1865

豊後杵築藩士の豊田家に生まれたが、のち豊後佐伯藩の明石家を継ぎ、同藩の書物奉行をつとめた。はじめ三浦黄鶴に漢学を、鍋木雲舟に画を学び、一時日田の咸宜園にも学んだ。能書家として活躍したほか、詩や画にもその才を発揮した。

津田秋草

つだしゅうくさ 1802-1864

豊後国速見郡別府の人。1821年咸宜園に入塾。のち帰郷し画を描いているが、詳細な活動は不明。同門の平野五岳らと親しく交友した。



田能村竹田画、廣瀬淡窓賛「山水図」1829頃(大分県立美術館蔵)